

短
歌

丹
後
半
島
行

田
中
順
二



春の海をりをり見えてパスの窓に過ぎゆく尾和の村袖志の村

過ぎし世の地震^なに曲りしままの道かの畑なかに残れるあはれ

恋ひゆけば山のみ寺も渚の家もなべて若葉のかがよへるなか

昼過ぎし渚に迫り逝く春の水そよぎるる棚田幾枚

舟底より氷に漬けし魚出だす人去りてより渚しづけし

逝く春の心に沁みてくらげひとつ澄みとほる潮のなかにかがよふ

羅針盤に日の射す見れば人あらぬ灯台の下のがしづこころ

うつしみの疲れも晩春の旅なればめぐりめぐりて経が岬にあり

舟の上に見れば恋ほしもはるかなる青葉にひそむ舟屋幾軒

時過ぎて砂に埋もるる砲身に刻まれし露国の文字も寂しき

(女子大学教授・国文学)